

〈調査報告〉

歯科衛生士および学生における 訪問歯科の業務を通じた意識調査

濱 元 一 美*, 川 崎 晶 子**

Awareness survey on tasks during visiting dental services among dental hygienists and students

Kazumi Hamamoto and Akiko Kawasaki

I. 諸 言

高齢者の急増は要介護高齢者の増加ともなり、2000年に介護保険制度が導入され、高齢者を取り巻く介護サービスなどの社会背景は大きく変化した。高齢者は介護が必要な状況にあっても病状が安定していれば介護サービスを受けながら在宅で生活をするケース、あるいは施設に入所するケースなどさまざまとなった。そのため、要介護者を支援する医療分野や福祉分野などの従事者への社会的要請は増大した。

歯科においては、歯科診療所に来院できない要介護者に対して、歯科医師や歯科衛生士が居宅や施設を訪問し、歯科処置を行うというスタイルが普及していった。訪問歯科診療は患者のQOLの維持・向上の観点からは大変重要な歯科医療²⁾であり、それらに必要な知識や技術を習得する必要がある。また、歯科医療従事者の情報の共有化だけでなく、他の医療や福祉との連携や情報の共有化が求められる。要介護者の要介護状態や介護が必要となったプロセス、要介護者を取り巻く家庭環境や社会背景などは一元的ではなく、要介護者の置かれている環境や

その状況を理解することが大切である。要介護者の生活の維持や向上に必要な口腔ケアを包括的・持続的に担うことが求められている³⁾。また、口腔機能の低下へのアプローチを図るため、さまざまな方法によって口腔機能に関する評価を行い、個別のプログラムによって口腔機能の向上を検討することは重要である⁴⁾。それらを踏まえ、訪問歯科診療の補助や訪問歯科衛生指導などを適切に実施できる歯科衛生士を育成していくことは極めて重要であり、訪問歯科の分野についての意義を十分に認識してもらえようような取り組みが必要である。

本論は、訪問歯科に関する学生教育への取り組みを検討することを目的とし、訪問歯科を経験する歯科衛生士、そして訪問歯科診療、あるいは訪問歯科衛生指導に関する現場を見学した学生に対して、訪問歯科の業務に関する意識調査を行ったので報告する。

II. 対象および方法

1. 対象

対象者は、現役の歯科衛生士（以下、歯科衛生士と称す）と関西女子短期大学（以下、本学

*関西女子短期大学 教授

**関西女子短期大学 助手

と称す）歯科衛生学科 3 年生（以下、学生と称す）とした。歯科衛生士は、平成 23 年度に訪問歯科の業務を経験した大阪府下に勤務する歯科衛生士 32 名とし、学生教育に理解を示し、調査協力を得られた者であった。また、学生は、訪問歯科に関する業務の見学を希望した 33 名とした。今回の訪問歯科に関する見学は、カリキュラムに含まれていなかったため希望制とした。

2. 調査方法

方法は、いずれも質問紙調査とした。歯科衛生士には、主に要介護者に関する業務を通じた意識内容の質問とした。学生には、歯科医師あるいは歯科衛生士が訪問する居宅や高齢者施設での歯科診療や歯科衛生指導の実際を見学後に、見学を通じた意識内容の質問とした。

3. 調査期間

調査は、学生には、訪問歯科見学後の平成 23 年 12 月とし、歯科衛生士には学生の調査後の平成 24 年 1～2 月とした。

4. 分析方法

歯科衛生士（A 群）が考える学生のうちに学んでおくと思う点と学生（B 群）の見学を通して学んだと思う点を比較し、解析ソフト SPSS 16.0 による Pearson カイ 2 乗検定を用いた。その他については単純集計とした。

5. 倫理的配慮

質問紙調査を行う際に、調査の目的やデータの取り扱いについて説明し、調査の趣旨に理解を示し、同意を得られた者を対象者とし、無記名によって実施した。また、得られたデータについては個人が特定されないよう取り扱い、プライバシーの保護に務めた。

Ⅲ. 結 果

1. 歯科衛生士に対する調査

(1) 年齢、歯科衛生士歴、就業体系

年齢は 21 歳から 61 歳までと幅広く、平均年齢は、 45.4 ± 11.9 歳であった。図 1 は、歯科衛生士歴を示し、10 年以上が 78.1% と最も多く、次いで 1 年以上～3 年未満の 12.5% であった。図 2 は、就業体系を示し、非常勤が 71.8% と最も多く、次いで常勤の 21.9% であった。常勤で働きながら非常勤もこなす常勤と非常勤は 6.3% であった。

(2) 業務内容、活動場所

図 3 は、訪問歯科の業務内容を複数回答してもらった結果を示している。口腔衛生に関する業務は 100% と、全員が選択した。一方、口腔衛生に関する評価は 68.8% に留まり、全員が口腔衛生に関する業務を行っているのに対し、口腔衛生に関する評価は、必ずしも全員が行っているとは限らない結果となった。これは適切な口腔衛生評価を行わずして口腔衛生に関する業務にあたっているのか、あるいは口腔衛生評価を行う者を行わない者が複数で訪問し、分担

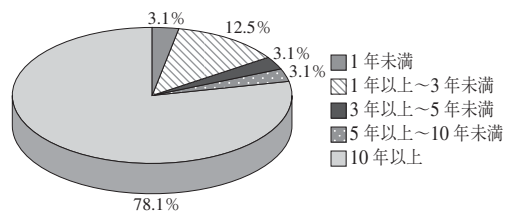


図 1 歯科衛生士歴 (n=32)

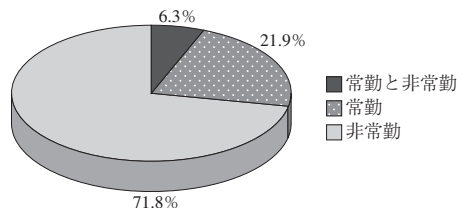


図 2 就業体系 (n=32)

* 「常勤と非常勤」については、常勤で就業し、且つ他の就業先で非常勤としても就業している者である。

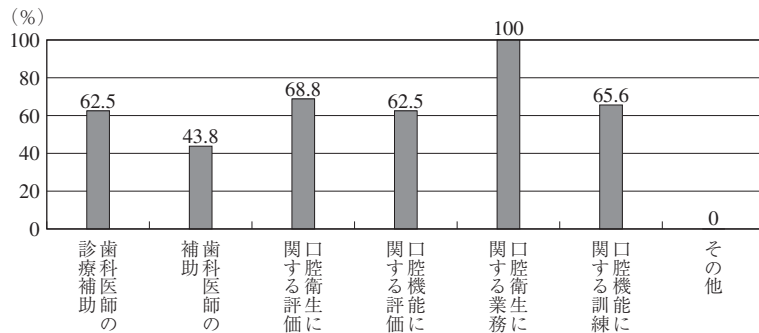


図3 訪問歯科の業務内容（複数回答 n=32）

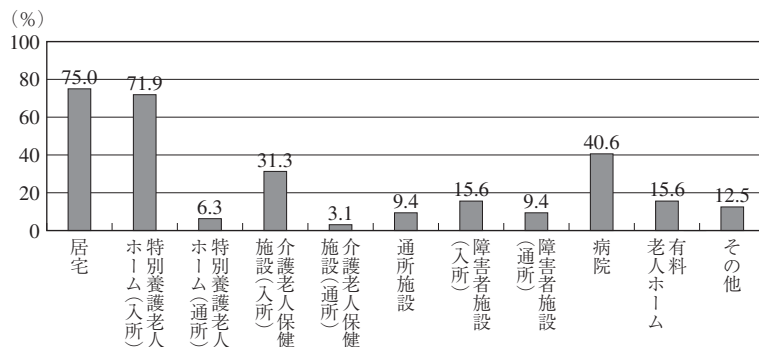


図4 訪問歯科の活動場所（複数回答 n=32）

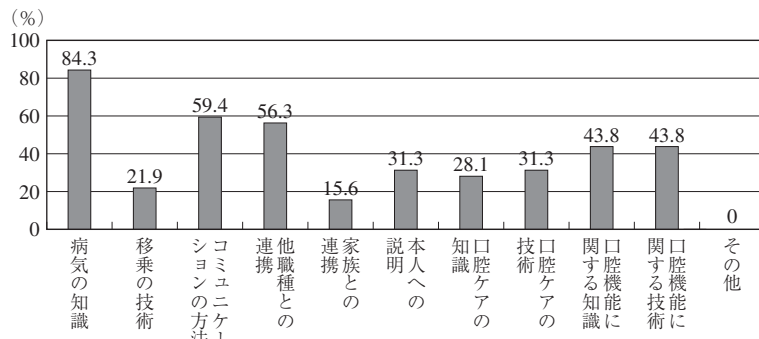


図5 要介護者に関する業務を通して難しいと思う点（複数回答 n=32）

して業務にあたっているのかは不明であった。一方、最も少なかったのは、歯科医師の補助の43.8%であった。

図4は、訪問歯科の活動場所について、複数回答してもらった結果である。最も多かったのは、居宅の75.0%であった。次いで、特別養護老人ホーム（入所）の71.9%、病院の40.6%

であった。介護老人保健施設での活動は、入所の31.3%に対し、通所は3.1%と入所の約1割であった。その他では12.5%が占め、グループホームや認知症対応型通所施設と記載されていた。

(3) 業務を通じた意識

図5は、要介護者に関する業務を通して難し

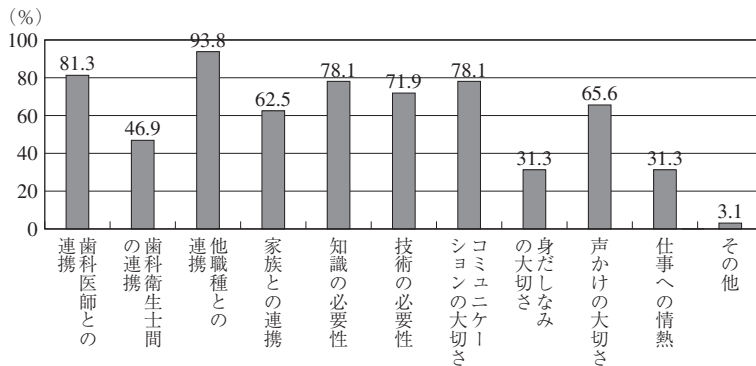


図 6 要介護者に関する業務を通して必要と感じる点 (複数回答 n = 32)

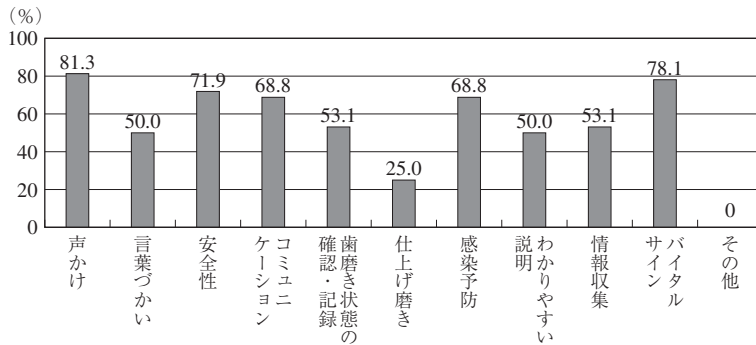


図 7 個別指導で気をつけている点 (複数回答 n = 32)

いと思う点を複数回答してもらった結果である。最も多かったのは病気の知識であり、84.3%を占めた。次いで、コミュニケーションの方法の 59.4%、他職種との協業の 56.3% が続いた。口腔ケアや口腔機能に関する知識や技術については、半数に満たなかった。また、家族との連携は 15.6% であったのに対し、本人への説明は 31.3% と、その割合は高かった。

図 6 は、要介護者に関する業務を通して必要と感じる点を複数回答してもらった結果である。最も多かったのは、他職種との連携の 93.8% であり、ほぼ全員が回答した。次いで、歯科医師との連携が選択され 81.3% であり、要介護者を取り巻く専門職種間の連携を重要と考えていることがわかった。しかしながら、歯科衛生士間の連携は 46.9% と、半数にも満たない結果となり、個々の歯科衛生士が責任を持って

要介護者を担当しているものと考えられた。一方、身だしなみの大切さや仕事への情熱は 31.3% に留まった。

図 7 は、個別指導で気をつけている点を複数回答してもらった結果である。最も多かったのは、声かけの 81.3% であった。次いで、バイタルサインの 78.1%、安全性の 71.9%、感染予防の 68.8% となった。仕上げ磨きは 25.0% と最も少なく、歯磨き状態の確認・記録でも約半数の 53.1% であった。個別指導を行う際、要介護者に対する配慮を十分に気をつけていることが示された。

2. 学生に対する調査

(1) 見学した内容、場所

訪問歯科に関する現場の見学希望者 33 名は、3 年生の全学生数の約 1/3 にあたり、1 か所に

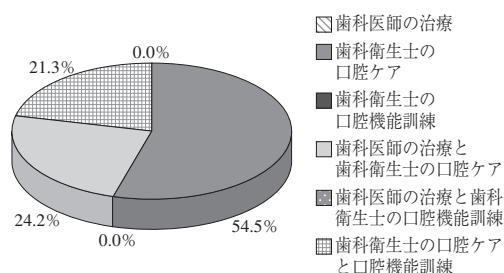


図8 見学した内容 (n=33)

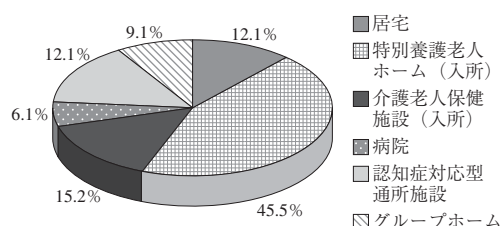


図9 見学した場所 (n=33)

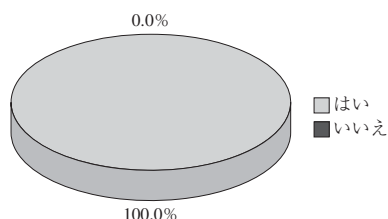


図10 有意義だったか否か (n=33)

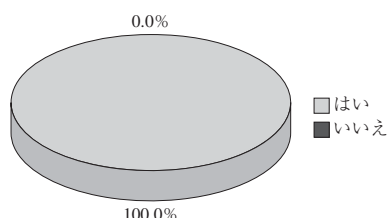


図11 高齢者施設実習で役立ったか否か (n=33)

赴く学生数は1～3名であった。図8は、訪問歯科に関する歯科医師や歯科衛生士の業務を見学した内容を示し、歯科衛生士の口腔ケアが最も多く54.5%だった。次いで、歯科医師の治療と歯科衛生士の口腔ケアの24.2%、歯科衛生士の口腔ケアと口腔機能訓練の21.3%が続き、全員が歯科衛生士の口腔ケアを見学していた。

図9は、図8を見学した場所を示し、特別養護老人ホームが最も多く45.5%だった。次いで、介護老人保健施設の15.2%、居宅および認知症対応型通所施設の12.1%が続き、学生はさまざまな場所に同行し、見学を行っていたことがわかった。

(2) 見学後の意識

図10は、訪問歯科に関する見学について有意義だったか否かを示し、全員がはいと回答し、有意義であったことがわかった。図11は、その後の高齢者施設実習で役立ったか否かを示し、全員がはいと回答し、役立ったことがわかった。いずれも、訪問歯科の見学に対して全員が肯定的な意識を示した。

また、訪問歯科の見学を希望した理由を自由記載してもらったところ、「興味があった」「勉

強したかった」など、高い関心を持っていたことがわかった。また、「就職先で訪問歯科を行っている」という学生もいた。今回対象となった学生は、希望制であったことから訪問歯科に対する何かしらの目的意識が高く、前向きであったことがわかった。

3. 歯科衛生士(A群)と学生(B群)との比較

歯科衛生士をA群とし、学生をB群として、A群には学生のうちに学んでおくと思う点を選択してもらい、B群には見学を通して学んだと思う点を選択してもらった。選択する項目は、歯科衛生士の業務、患者対応、往診や在宅ケアの方法、歯科医師の治療・補助方法、患者の様子、患者の疾患状態、歯科衛生士の業務役割、実施手順や方法とした。先に調査を行ったB群に複数回答で問うたところ、選択数の平均は3個となった結果を踏まえ、A群には設問のなかから上位3個を選択してもらった。A群は、32名中4名の回答不備者があったため、それらを除く28名を対象とし、B群は、33名中6名の回答不備者があったため、それらを除く27名を対象とし、比較した(表

表 1 A 群の学生のうちに学んでおくと思う点と B 群の見学を通して学んだと思う点の比較

項目	区分	A 群 (n=28)	B 群 (n=27)	検定
歯科衛生士の業務	無	28.6	40.7	
	有	71.4	59.3	
患者対応	無	64.3	48.1	
	有	35.7	51.9	
往診や在宅ケアの方法	無	92.9	66.7	
	有	7.1	33.3	
歯科医師の治療・補助方法	無	100.0	92.6	
	有	0.0	7.4	
患者の様子	無	60.7	70.4	
	有	39.3	29.6	
患者の疾患状態	無	67.9	88.9	
	有	32.1	11.1	
歯科衛生士の業務役割	無	60.7	51.9	
	有	39.3	48.1	
実施手順や方法	無	92.9	70.4	*
	有	7.1	29.6	

SPSS 16.2 Pearson カイ 2 乗検定 (%、* : $p < 0.05$)

1 参照)。表 1 の区分では、選択なしを無、選択ありを有として記した。

歯科衛生士の業務について、両群ともに選択した者は選択しなかった者よりも多く、また B 群よりも A 群の方がその傾向が強かった。しかしながら、両群間での有意差は認めなかった。患者対応は、A 群は選択しなかった者の方が選択した者よりも多く、B 群は選択した者の方が選択しなかった者よりも多かったが、両群間での有意差は認めなかった。往診や在宅ケアの方法、歯科医師の治療・補助方法については、両群ともに選択した者よりも選択しなかった者の方が多く、両群間での有意差は認めなかった。患者の様子、患者の疾患状態、歯科衛生士の業務役割についても、両群ともに選択しなかった者の方が選択した者よりも多く、有意差は認めなかった。実施手順や方法については、A 群の方が B 群よりも選択しなかった傾向が強く、両群間で有意差を認めた ($p < 0.05$)。その他には、A 群によって、歯科以外の知識、

介護技術などが記されていた。

IV. 考 察

1. 歯科衛生士について

(1) 年齢、歯科衛生士歴、就業体系の調査結果より

すべての歯科衛生士が訪問歯科に關与しているわけではなく、今回は実際に訪問歯科を経験している歯科衛生士を対象としたところ、大半が 10 年以上の歯科衛生士歴を有する熟練者が多い傾向にあった。1 年未満および 1 年以上～3 年未満の歯科衛生士歴を持つ者は、全員が常勤で働いており訪問歯科の業務を行っていた。卒業時の歯科衛生士の約 90% が歯科診療所に就職するとされていることを考えると、就業先は歯科診療所と考えられ、業務の一環としてすでに訪問歯科を行っていることがうかがえた。一方、非常勤として訪問歯科の業務を行っている歯科衛生士は、複数の居宅や施設を担当し、業務にあたっていることがうかがえた。学生の就職先となる歯科診療所が訪問歯科に関する業務に携わっている可能性は十分に考えられ、今後は希望する学生だけではなく、全員に訪問歯科に関する業務を見学させる必要があると思われる。

(2) 業務内容、活動場所の調査結果より

訪問歯科に関する業務といっても、歯科医師による歯科診療や歯科衛生士による口腔衛生指導などさまざまであるが、歯科医師の診療補助業務のために訪問歯科を行っている者も約 6 割を占め、訪問歯科での歯科治療が普及しつつあることがうかがわれた。一方、口腔衛生に関する歯科衛生士が中心となっていく業務については全員が実施しており、口腔衛生に対する社会的認知度の高まりを思わせた。また、それに伴って歯科衛生士に対する需要の大きさがうかがわれた。しかしながら、同一の歯科衛生士が口腔衛生指導と口腔衛生に関する評価の両方を担っているとは限らず、疑問が残る結果となった。浅野ら⁵⁾は、「口腔ケアは入所者とのふれ

あいを含め、ADL、QOL の維持向上に寄与するところが大きく、また、要介護高齢者の死亡原因の第一位である誤嚥性肺炎の予防を目的としても推奨すべき」と述べており、口腔衛生に関する評価結果に基づいた口腔衛生指導の実施を明確化する必要性がうかがわれた。学生教育のなかで、口腔衛生に関する評価を行い、その評価に基づいた口腔衛生指導を実践するという方法を十分に学ばせる必要性が考えられた。

また、訪問歯科の活動場所は居宅が最も多く、在宅で介護サービスを受けながら生活している要介護者が歯科衛生士を必要としていることが推察された。歯科診療所での歯科衛生士は常に歯科医師から指示や教示を乞うことができるが、訪問歯科では、必ずしも歯科医師と一緒に訪問するとは限らず、まして居宅での活動の場合、他職種もいないため歯科衛生士としての力量が問われることになるであろう。学生には訪問歯科に関する見学に加え、さまざまな事例を想定した実習形式の教育を展開していく必要性が考えられた。

(3) 業務を通じた意識の調査結果より

訪問歯科での業務を行う場合、対象者は要介護者であり何らかの疾病を有し、またその疾病も重複していることが多いと考える。しかしながら、歯科衛生士は看護職よりも全身的な医学的知識が乏しいことは否めず、病気の知識を難しいと思う傾向は大いに考えられた。また、全身的な医学的知識のみならず、口腔疾患についての知識も必要となる。目の前にある口腔疾患を見過ごしたまま口腔清掃を行っても、咀嚼・嚥下・言語などの基本的な口腔機能を維持させ、歯性病巣感染を防止して QOL を高めることはできない⁶⁾。また、要介護者に対するコミュニケーションの方法についても半数以上の者が難しいと感じていた。口腔領域に痛みを伴う場合や理解度が低下している場合、口腔ケアなどに拒否を示す要介護者は少なくなく、コミュニケーションを図りながら要介護者と向き合い進めていくことが、訪問歯科には不可欠なので

あろう。

また、他職種や歯科医師との連携を必要と感じている傾向が多く示され、要介護者を取り巻く社会背景を理解しながら、他職種との連携を図る必要がある。要介護者を中心に、複数の専門職がかかわることは通常であり、歯科衛生士も他職種に必要事項を申し送ったり、逆に申し送られたりすることを躊躇することなく行う能力が求められるであろう。身だしなみやあいさつは、当事者との人間関係をつくる始まり⁷⁾であるにもかかわらず、身だしなみの大切さや仕事への情熱について、今回約 3 割の者が選択したに留まった。今回の対象者は、歯科衛生士歴 10 年以上の者が圧倒的に多かったことから、適切な身だしなみは習慣化しているのかもしれない。しかしながら、歯科衛生士が一人で現場に赴く訪問歯科では、適切な身だしなみの度合いが難しく、常に意識することも重要と考えられた。学生の身だしなみについて、学内実習のなかでのきめ細かい指導を今後も継続することが必要であると考えられた。

個別指導で気を付けている点について、声かけが圧倒的に多く選択された。コミュニケーションを図ることを難しいと感じているからこそ、より多くの声かけを必要と感じているのかもしれない。仮に返答ができない要介護者であっても、介護者からの声かけを聴き理解できることも多くある。要介護者から見れば、身体的非対称性から来る恐怖、介護者に対する不安、介護者や介護状況に関する周到な配慮などによって、強度の心理的緊張をはらんだ場であり、介護者の方から見れば、そのような要介護者の心理を反射した複雑な心理的交渉の場であり、人格が交差する場であり、感情が共鳴・反発する場でもある⁸⁾。重度の要介護者を支援しようとする場合、良かれと歯科衛生士の判断や感情によって支援の在り方を考え推し進めてしまわないためにも、介護を受ける側ありきで常に考え、取り組むことを心がけなければならない。そのためにも、声かけは重要な要素となりうる

であろう。

医療現場の基本は、本来、医師と患者との間の相互関係で成り立っているが、多くの医師は、疾患の診断と治療に関心が偏っており、個としての患者の日常生活や介護の実際などについてほとんど情報をもたない⁹⁾との報告から考えると、今回対象となった歯科衛生士は、歯磨きなどの技術面は、すでにクリアできていることから、それよりも要介護者に対する配慮を優先して取り組んでいる傾向が示され、人間性を重視する人間味ある対応で業務の遂行を心がけている様子がうかがえた。学生は、学生同士の相互実習としての声かけやコミュニケーションはこなせても、現場での要介護者に実践できるとは限らず、いかに実践に結んでいけるかが課題であろう。

2. 学生について

(1) 訪問歯科の見学後の調査結果より

今回、学生自らが希望し、訪問歯科にかかわる歯科医師および歯科衛生士に同行するなかで現場での歯科処置を見学した。希望制ということもあり、訪問歯科に関する意識は高い傾向を示した。初めての試みのため、学生間の情報は全くないなかでの実施であり、不安も大きかったと考えるが、実施後、全員が有意義であったと回答し、不安以上に得た学びの大きさがうかがえた。女子学生で、職業人として自らの一生を考える者は、現在でも必ずしも多くはない¹⁰⁾と言われるなか、歯科衛生士という専門職を目指し、訪問歯科の見学を希望する姿勢は、非常に前向きであると捉えることができた。希望した理由は、学生それぞれに異なるものの訪問歯科に関心を持っており、訪問歯科に関する見学の意欲は高く、吸収力も強く成果がうかがえた。今後、希望制にこだわらず、一人でも多くの学生が訪問歯科に関する見学を通じた学びの機会を得られることが重要であろう。

3. 歯科衛生士 (A 群) と学生 (B 群) との比較結果より

歯科衛生士の業務については、両群ともに学んでおく必要を感じていたが、その他の設問の選択にはばらつきが見られた。しかしながら、両群間での有意差が認められたのは実施手順や方法についてであり、A 群では B 群よりも圧倒的に選択する者が少なかった。現場経験を持つ A 群では、日々変化する要介護者の状態を察知し、その状態に応じて手順や方法を工夫するということが習慣化しているのかもしれない。一方、B 群でも選択した者よりは選択しなかった者の方が多いものの、未経験者である学生にとっては、基本的な手順や方法の学びは重要であるという意識を持っていることがうかがえた。

V. まとめ

訪問歯科に関する業務を通してさまざまな意識を調査したところ、対象となった歯科衛生士は、歯科衛生士歴が長く熟練者が多く、非常勤で複数の現場を担っていることがわかった。また、訪問歯科の業務を通して要介護者に対して難しいと思う点は、口腔ケアや口腔機能訓練などの技術面よりも医学的知識やコミュニケーションに関する事項であり、必要と感じる点は、他職種や歯科医師との連携と考えていた。活動する歯科衛生士の多くが非常勤であったことを考えると、なお一層、他職種との密な連携が望まれる。

訪問歯科の業務を行うには、口腔領域のみに捉われず、要介護者を取り巻く家庭環境や社会背景などの状況を理解した上で、十分な声かけを取りながら要介護者を主体とし、歯科衛生士として支援していくことが重要である。学生は、見学したことを肯定的に捉え、学生なりの学びを感じていた。学生にとって、訪問歯科の現場を見学できる機会は、視野を広げることに繋がり有用であることが示された。また、訪問歯科を想定した学内実習を検討する必要性も

ある。今後、学生教育の一環として全学生が訪問歯科に関する業務を見学するなかで、いかに要介護者への理解を深めることができるかが課題である。

謝辞

本研究は、平成 23 年度関西女子短期大学奨励研究費の助成によるものであり、ここに記して感謝の意を表します。また、本調査にご協力を賜りました歯科衛生士の方々ならびに学生達にも心より御礼申し上げます。

文献

- 1) 濱元一美：歯科衛生士のための口腔介護実践マニュアル、メディカ出版、大阪、第 1 版、26、2012.
- 2) 紋谷光徳、野村修一、五十嵐敦子：訪問歯科診療見学実習後における学生の反応、日歯教誌 17(1)、109-114、2001.
- 3) 渡辺芳彦、若生利律子、阿部一彦：介護施設と歯科医療を結ぶ施設常勤歯科衛生士の役割－入所利用者の歯科受療支援を含む口腔ケア－、老年歯学 20(4)、343-349、2006.
- 4) 濱元一美：要介護高齢者における口腔機能評価に関する報告－RSST 評価からの一考察－、老年歯学 25(2)、139-142、2010.
- 5) 浅野倉栄、中島丘、三宅一徳、岡田春夫、中島俊明、遠見治、磯部博行、加藤嘉夫、長坂浩：歯科室を有する特別養護老人ホームでの口腔ケアの試み、老年歯学 22(3)、332-335、2007.
- 6) 山根源之：口腔ケアに必要な口腔粘膜疾患の基礎知識、老年歯学 18(3)、222-226、2003.
- 7) 1) 同様、18.
- 8) 竹田茂夫：「周知的」身体と市場原理、現代思想 37(2)、200-211、2009.
- 9) 田中景子：医科における口腔機能と食支援理解のための参加的な実習の取り組み、日歯教誌 18(1)、131-136、2002.
- 10) 井沢良智：今どきの学生とあきらめない教育－次代を引き継ぐ主役なればこそ－、創成社、東京、第 1 版、130、2009.